



まずは、マクロよりミクロ 目の前の一人の 幸せのために

三好大助氏



— バングラデシュでの教育支援や Google 日本法人での非営利セクター支援など社会的インパクトが大きい活動をしてきた三好さんの冒険のはじまりについて教えてください。

意外かもしれませんが、学生時代の焦燥感がきっかけです。ソフトテニスに夢中で、体育会系の部活で日本一を目指したものの、僕は選手としては戦力になれず、次の目標設定に焦っていました。その時に読んだのが、ノーベル平和賞授与でも有名なグラミン銀行のムハマンド・ユヌス氏の著書です。19歳の僕は「すごい人がいる！」と感動し、すぐに会いに行きました。幸運にも同行で新規事業コーディネーターの職を得て、イスラム教のライフスタイルや子どもたちの人生観に触れるうち、教育関係の事業を思いつきました。— **それが高校生を対象としたキャリアマガジンの出版事業ですね。**

日本の子どもなら「将来はサッカー選手になりたい」とか「パン屋になり



三好氏のターニングポイントにもなったキャリアマガジン「SWITCH」

たい」とか夢を描きますが、彼らは親の職業を継承するのが一般的です。また、女子に教育は不要という考えも根強い。でも、もし子どもやその親が、職業選択や進学に前向きなら、選択肢として「情報」が必要だと思いました。

情報誌発行という具体的な活動に移れたのは、実は、グラミン銀行での新規事業失敗がきっかけでした。多くの人に認められようとするあまり、結果的に誰も必要としない事業になっていたんです。その経験から、「一人」でも幸せにできればいいと気持ちを切り替えたときに出会ったのが現地大学生のジャファーです。彼の夢は村の子どもたちにキャリア教育を届けること。ならばその夢と一緒に叶えることに全力を尽くそうと決めました。

こうして出版に至ったキャリアマガジンは、大反響を呼びました。学生たちはもとより、それ以上にジャファーが喜んでくれて、その感激は今でも忘れません。結局は顔の見える一人からの「ありがとう」が自分を満たしてくれると気づいた僕は、帰国後にこの思いを世界に展開しようとグローバルIT企業である Google に入社しました。

— **同社では非営利団体向けプロダクト Google for Nonprofits や、社会的事業への出資事業 Google Impact Challenge に尽力なさいましたね。**

Google には CSR という概念があり

ません。事業そのものが社会貢献であるべきという思想が定着しているからです。Google の「20%ルール」を使って国内有数の NPO の方々にヒアリングし、どんなプロダクトが求められているかチームを組んで考え抜きました。結果的に「Google が国内 NPO 支援の歴史を変えた」とおっしゃっていただける成果を残せました。

— **現在とこれからのプランは。**

仕事の成果が、社会のためという曖昧な正義感や、利潤追求の数字に還元されるだけでは充足感は得にくいと思います。Google でのプロダクト開発も学生時代から個人的にご指導いただいてきた日本の NPO の方々の顔を思い浮かべていました。どんな大きな変革も、一対一のミクロの関係の集積でしかないと改めて思い、今、フリーランスの立場から、企業戦略のファシリテーションや、本の執筆をしています。これからも顔の見える一人からの「ありがとう」を大切にしていきたいと思っています。

[聞き手：つな環編集部]

三好大助 (みよし だいすけ)

1988年鳥根県生まれ。早稲田大学在学中よりバングラデシュに滞在。グラミン銀行勤務を経て、高校生向けキャリアマガジンを創刊。帰国後 Google にて非営利団体対象の様々な事業立ち上げに尽力。独立後は企業戦略のファシリテーションや作家活動を開始。今夏、新刊「GIFT - 世界でいちばん頑張ってるきみに」を発売予定。